

近世女人の碑文

——油谷倭文子・谷幹々・頼梨影の墓碑銘——

要 旨

我が国に於いては、元来一般に故人の墓碑銘の多くは男子のものを以て扱われ、女性のそれは少ないように思われ、殊に近代においてその感が強い。しかし近世文人の場合、女性の墓銘に拘すべきものがま見受けられるが、大正の震災、昭和の戦災と度重なる災禍、またその後の墓地の整理など、時代の波はそれらも次第に煙滅の道をたどりつつある。筆者は先には村岡夫人の墓碑銘を取り上げたが(本紀要一四号)、この度は、賀茂真淵、奥門三才女の一人である油谷倭文子、画人谷文晁の妻幹々、及び無事平安であつた京都の頼山陽の妻梨影の墓碑銘をとりあげた。

柴田 光彦

近世、碑文を録したもので女性のものが少ないのは当然かとも思われるが、それらを集めて見ることも意義有ることと思われる。そこで本稿では、震災・戦災で傷ついた東京の油谷倭文子・谷幹々の碑銘と、無事健在の京都の頼梨影の墓碑銘をとり挙げてみた。

一 油谷倭文子の墓碑銘

岩本堅一先生の「江東訪碑記」には大正十二年（一九二三）の関東大震災のあと、幾日も経ていない本所深川の寺院の焦土の中で、賀茂真淵（一六九七—一七六九）県門三才女の一人、油谷倭文子の大きな烏帽子型の墓石の尺ばかり土に埋もれつつも幸いに無事であったのを探し当て、「短い秋の陽を受けて碑を拓っている気持は忘れ難いものであった」といい、続けて、

さて昭和廿年、東京は下町といわず、尽く戦火に見舞われ、乏しい私の書物もまた悉く灰になって、倭文子の墓の拓本も他の拓本類と共に烏有に帰してしまった。碑そのものはどうなったかと、その後訪ねて見ると、無惨や碑面は大方剝落して、読み得るものは約二百字に満たず、倭文子の墓と題した文字も「之墓」の二字だけ残っているに過ぎない。

と、「嗚呼悲哉」以下真名で刻された残欠の数行を紹介し、「碑は今、深川清澄町常照院墓地に在って、村田春海一家の墓のある本誓寺の墓地と相隣りしている」と結んでおられる（「昭和三十二年九月「書道」、『岩本素白全集』第三卷所収）。

山口剛先生の『断碑断章』（昭和五年 武蔵野書院、『山口剛著作集』第六所収）は震災後の江戸の碑の破損の様子をよく伝えている。秋草堂門下の加藤諄先生からも山口先生が、早稲田大学の教場で碑文のことを話されたということを伺っていたが、岩本先生は教室ではかつて拓本のことなど一言も話されたことはなかった。尤も個人的には「若い頃は近藤（潤治郎）君と拓本を採りに歩き、通り過ぎた小川の石橋が板碑に見えて駆け戻ったりしたことがある」と話されたことがあるので、この文も懐かしく、先ず倭文子の碑をとりあげることにする。

倭文子の碑銘の仮名文は真淵の『賀茂翁家集』巻四に載せられている。

倭文子^{しづこ}が墓の石にかきつけたる 原本は真名にて書り

をみなあり。名をばしづ子といふ。しづ子はいにしへのしづりにあらずして。心のみやびいにしへにもとづけり。しづ子はいにしへのしづりにあらずして、すがたのまぐはしさ、いまにすぐれたり。其たゞに心のみやびのみなるにあらず、文にも哥にもいにしへなり。其すがたのまぐはしかるのみにあらず、したしきにもうるときにもにきびたり。しづ子^{倭文子}はしづ子^{賤兒}にあらずして、父は、につかふるには、家のしづ兒なせり。中く^{賤兒}にそのしづこ^{賤兒}をかへり見るには、はたしづとせざらまくせり。いはんやせ^{賤兒}にしたがひ、またうがらやがらをしたしむをや。かれその家のにきぶることもうつはたのごとし。やがてする、いにしへのしづりは、今のよき、ぬにまされることを、またうなるはなりの時より、ふみをか、まく思ひて、ことを父母に

まをせり。父母うつくしとおもひてわれにつぐ。われもつはた
 おらむことををしへて、まだあまたとしならぬに、いにしへのあや
 をおることをさとりき。其かけるものは、伊香保の記、よみともがきに
 をくりこたへる文など、ともにかりはたなりけり。いふならく。い
 にしへのしづはた帯、たれしかまさりなんや。あはれかなしきかも
 や。年の名は寶の曆の二のとし、秋の風はじめておこる時に、はた
 ちといふよはひにて身まかりぬ。まかるとき哥よみせり。これもま
 たたゞに父母をなごさんずるこゝろのみなり。そのよめる哥、人の
 世に先だつ事のなかりせば桐の葉もちらすやあらまし

しかし眞名については、新全集(卷二二)の『賀茂翁遺草』卷十一の
 五十一に「倭文子か墓の石にかき〇たる」と仮名文を載せ、頭注に、

注、『縣居文詞』には、眞名・仮名兩様の遺文「倭文子之碑銘」
 を乗せる。

としているのみである。この遺草は楫取魚彦の編になるもので「春郷墓
 碑文」(卷十四ノ五十二)・「光海靈神碑文」(卷十一ノ五十二)〔賀茂翁家
 集〕は漢字仮名まじり)は眞名で載せているのに、何故か倭文子には眞
 名を欠いている。

また『遺草』は末に二種の歌を掲げて傍注をつけている。

このうたいのせず
 桐の葉のこよなど人はいふめれとしはしはかりやいそくなるらん
イ本のうた
 人の世にさきたつことのなかりせは桐のほと葉もちらすやあらまし

清水浜臣は『泊泊筆話』で、

(前略) 又、今板にありたるあやぬの、末に碑文をあげて、しづ子が

身まかれるをりのうたとて、

きりの葉の、諸木に先だちてちるゆゑ、ことごとくこよなき早世か
 など、世人はいふならむなれど、末の露、もとのしづく、しばしの
 たがひなりと、よめる心は、二句いさ、かいひおほせぬこ、ちせら
 る。後におのれ此碑文をみづから摺して、蔵せるには、

人の世に先だつことのなかりせば桐のひと葉もちらすやあらまし
 とあり。板本とは大きにたがへり。これも碑にゑるをりに、翁のひ
 き直されしものなるべし。

と記している(『日本随筆大成』第一期七)。私はこのことを『国学者伝記
 集成』の倭文子の項に引かれていたので知った。

その『文布(あやぬの)』(寛政二年)の末尾には、眞名の墓銘も掲げら
 れている。末尾には「桐の葉」の歌を載せているので、浜臣はその違
 を記したのである。また写本もいくつかあるが、私の見た二本(早稲田
 大学図書館・内閣文庫)はともに仮名文も載せているが、仮名文を引く前
 に、「右はこゝの語也。そのよみは」として仮名の碑銘を掲げている。
 なお歌は前者は「桐の葉」、後者は「人の世」となっていた。そしてそ
 の頭注には、文字遣いに若干の異同があるが、両本ともに次の如く記し
 ている。

賀茂のぬしのかたらく。すべからく御国のいにしへは語をぬしとし
 て、字をやつこととして語すらかなへば、字は心にまかせて用ひたり
 と。然るに今は字を守りて語をこゝろ得るなれば、かくこゝの語を
 もて二たひかけり。

此をみな中ころいとやむ事なき御もとなつかへつるが、やまひによりて家にまかぬ。

後に父母をとこをあはせしに、ほどもなくみまかりき。これらの事は皆いとしばらくなれば、はぶきたりとぞ。

実際の墓碑銘は、浜臣の記すごとく真名であり、被災で傷み、剥落もひどいが、その碑銘は明らかにしておかなければなるまい。

そこで拙拓を基にして『文布』刊写本及び、『縣居翁文歌』（大阪府立図書館・国会図書館本。文字に若干の異同がある）を頼りに、真名碑文の復元を試みることにする。

つぎに、碑の欠損部分は先の『県居翁文歌』と、この『文布』を参考に、真名の全文を掲げる。此の碑は岩本先生のいう所謂「烏帽子形」の、右端の上下の欠けている変形の石に彫られている。碑陰もまた同様である。そこで四行ほどは、字数の少ない形であったことと思われるが、その字配りは銘文に剝落がある今、完全なる旧拓を知らぬので適当にせざるを得ない。第一、二行はさらに短いかもしれないが、なかなか字数合わせが困難であり、適当に表記せざるを得なかった。踊り字の処置が難しい。あるいは第一行は「有女子名曰」の四字のみであるかと思われるが、今は明らかに出来ない。なお「庶兄」のつぎに「及親族」の字句があるが字数からみて碑には入らない。

文中行替りに「」を付し、「」は碑文の剝落している箇所である。終りに読下しを仮名文を対照にして注の形で付載する。

碑陰も掲げるが、墓は塀の間際にあり、見ることも、採拓も難渋、かつ傷みも甚だしく、本にも記載が無いが、此の碑石は先に述べたような大きな烏帽子形で、定形では文字は彫れずに案配したもので、掲出の文ではほぼ完全なものとして判断されるので、そのまま示すことにした。

（碑表）

〔有女子名曰〕

〔倭文字乃古波匪古之倭文志〕

〔心乃文藻本于古里計倭文字波匪古〕

〔之倭文志容乃目微勝〕于今多里其徒匪心

〔乃文藻奈妻文毛爾〕謂爾毛古也其徒匪容乃目微

〔加妻親爾疎毛〕爾也倭文字波不賤兒志事父母波

〔猶家賤兒却〕顧其賤兒則將不為賤之況乎從壻親庶兄

〔也故其〕家之辭夫妻如數乃知古之倭文波勝今之鮮

〔絹〕爾又自髻髮之時樂綴文而請諸父母爾父母奇之而託

于余々誨之織素乎而未數年得成古之文也其所綴者

伊香保記往朋友之辭等比為綺也所謂古之倭文織

帶執加勝之乎嗚呼悲哉寶曆二年秋風初起之時齡廿

荷死里臨死詠詞此亦唯將慰父母而其詞曰 比登乃

與爾左幾太都古都乃奈加利世婆岐里之比登藩毛

千蘿受也安蘿麻思

藤原 康祕立

賀茂縣主真函誌」

右の文中、建碑者の名は『家集』にも『文布』にもない。康祕(秘)は夫の名、「ミチヤス」か。函は淵の異体字である。いささかくどいようにも思われるが、右の眞名を仮名文と合わせて記せば次のようになる。

文中の「」は文集にあつて碑文にないと思われる語句である。適宜改行し、また『文布』『家集』との異同は省略した。

女子(ヨミナ)有(アヘ)り。名をば倭文子と曰ふ。々々々は古の倭文(シヅリ)に匪(アラ)ずして、心の文操(ミヤビ)古(イニシヘ)に本づけり。

倭文子は古の倭文(シヅリ)に匪(アラ)ずして、容(スガタ)の目微(マグハシサ)今に勝れたり。其の徒(タダ)に心の文操(ミヤビ)なるに匪(アラ)ず、文にも詞にも古(イニシヘ)なり。其の徒に容の目微(マグハシ)かるに匪(アラ)ず。親にも疎きにも蘇(和、ニギ)びたり。

倭文子は賤児(シッコ)にあらずして、父母(チチハハ)に事(ツカフ)ルには家の賤児(シッコ)猶(ナ)せり。却(ナカナカ)に其の賤児を顧(カヘリミル)には、則將(ハタ)賤(シツ)と為(セ)ざらまくせり。之況乎(イハンヤ)婿(セ)に従ひ、庶兄(モロセ)を親し(み、及(マ)タ)族(ウカラヤカラ)を親し(む)をや。故(カレ)其の家の蘇(和、ニギ)ぶることも數蘇(ウツハタ)の如し。

乃(ヤガテ)知る、古(イニシヘ)の倭文(シヅリ)は今の鮮絹(ヨキキ

ヌ)に勝(マサ)れることを。又髻髮(ウナヒハナリ)の時より、文を樂綴(カカマシクオモヒ)て、諸(コト)を父母に請(マヲ)せり。父母奇之(ウツクシトオモヒ)て予(ワレ)に託(ツ)ぐ。予(ワレ)素(モトツハタ)を織らんことを誨(ヲシヘ)て、未(マ)だ數年(アマタトシ)ならぬに、古の文(アヤ)を成(オル)ことを得(サ)ト)りき。

其の所綴者(カケルモノ)は伊香保の記・朋友(トモガキ)に往還(オクリコタヘタル)辭(フミ)等、比(トモ)に綺(カリハタ)なりけり。所謂(イフナラク)、古(イニシヘ)の倭文織帶(シツハタオビ)、孰(タレ)しか勝(マサ)りなんや。

嗚呼(アハレ)悲哉(カナシキカモヤ)。「年の名は」寶の曆の二つの年、秋の風初めて起る時に、齡廿(ハタチトイフヨハヒ)にて死(ミマカ)りぬ。

臨死(マカルトキ)詠詞(ウタヨミ)せり。此れも亦唯に父母を慰(ナゴ)為(サ)ん將(ズ)る(心)而(ノミ)なり。其の詞曰(ヨメルウタ)、比登乃與爾左幾太都古都乃奈加利世婆岐里之比登藩毛千蘿受也安羅麻思

ひとのよにさきだつことのならりせばきりのひとはもちらずやあらまし

全集所載の歌は、前に、

桐の葉のこよなと人はいふめれとしはしはかりやいそくなるらん

後に、碑文の歌を記し、桐の葉の歌の傍注に「このうたのせず」とあり、人の世にの歌には「日本のうた」とある。即ち浜臣の記す碑の歌が、このイの歌にあたる。

なを、『文布』および『縣居翁文歌』には、次の如く桐の葉の歌を掲げている、また文中現碑と若干の異同がある。(※傍注は「文歌」)

企里乃幡乃虚与奈登比登波以不梅例騰之婆志伴詞里夜胃蘇虞那婁羅無(羅)

(碑陰)

女子倭文父姓藤原

名政本母同姓名吟女其

先伊勢人為北島家藩臣退居飯野

郡多古治郷而稱油谷矣初吟女之父

来江門都下居於弓坊而後政本来自伊

勢以近親之故為壻嗣其家世々豊豪僮

僕盈百乃生一女子名倭文長而後養同

国北村氏弟康秘配之寶曆壬申七月十

八日倭文女為死葬深川本誓寺其行

所以記碑面也碑文則以

皇朝之古文依舊焉寶曆

三年七月立之

(読下し)

女子倭文。父姓は藤原、名は政本、母同姓名吟女。其の先は伊勢の人、北島家の藩臣たり。退きて飯野郡多古治郷に居して油谷と稱せり。初め吟女の父江門の都に來り弓坊に卜居せり。而して後、政本、伊勢より來る。近親の故を以て壻となり、其の家を嗣ぐ。家は世々豊豪にして僮僕百に盈つ。乃ち一女子を生む。名は倭文。長じて後、同国北村氏の弟康秘を養ひて之に配す。宝曆壬申(一七五二)七月十日、倭文女、病の為に死し、深川本誓寺に葬る。其の行ひは以て碑面に記せり。碑文は則ち皇朝の古文を以て旧に依れり。宝曆三年(一七五三)七月、之を立つ。

二 谷文晁夫人幹々の墓銘

森銑三氏は『谷文晁伝の研究』の十八で、

この年(寛政十一年)七月二十三日、文晁(一七六一—一八四〇)の妻幹々が、未だ三十にして逝いた。幹々のことは、その墓碑銘に精しい。私はその文が帝国図書館所蔵の『赤沼掃墓叢書』に載つてゐるのを、この稿起草し始めてから知つた。これもまだ活字になつてゐないものらしい。依つてまた左に全文を掲げる。

として墓銘を紹介して、

これに拠れば、文晁と幹々はいとこ同士だったのである。そして二人の結婚したのは天明五年で、時に文晁二十三、幹々十六だったのである。関其寧は通称源蔵、号南楼、知名の書家である。幹々がそのために作つた花譜は、すでに亡びてしまつたのであらうか。谷

家で刻したといふ幹々の観音像についても聞くところがない。墓碑銘の撰者安原希曾も私の知らぬ人である。源弘賢の屋代輪池たることは今さらいふまでもない。

幹々の墓は、右の墓誌銘にも記されたが如く、正面に文晁筆の画像を刻した珍しいものであるが、惜しいことに癸亥（大正十二年）の震災に荒廃に帰したといふ。

と結んでいる（『日本美術協会報』連載 昭和五年、『森銃三著作集』第三巻所収）。

森氏はそのまゝ墓には行かなかつたらしいが、その墓は上野駅にほど近い東上野の源空寺、文晁・祖父文治の墓の他、高橋至時、伊能忠敬の墓が隣接している。寺の隣の道路を隔てた墓地へ入り、すぐ左側に小さ



い龕の形の、痛々しい修補の跡があるが、女性像を陽刻した碑が小さい台石の上に修復した形で現存している。

上端の三角額部のの枠内には三本足鳥を陽刻し、隸書で

「翠蘭／孺人／平氏／之墓」

とある。裏面の右端は完全に欠け落ち、上端は各行に数字を残して、ざっくりと欠けている。なお左側には、追刻で、

「寶池院明譽想觀文中居士」下に二行に紀年があり、右上に「明」、左下に「二十八日」とある。寺に尋ねたがその人の名は分からなかった。

なお過去帳の寛政十一年七月二十三日には「彩操院瓊譽幹々大姉」と記されている。

先の森氏の引いた『赤沼掃墓叢書』からの銘を宛てれば、次の通りになる。

（裏面）

「孺人姓林其系出于平氏諱幹々字翠蘭文晁先生谷君配也考諱」

是邦妣穗積氏「實谷君之從母也以明和庚寅正月十七日生孺人」

于江戸年十六「歸于谷君性静淑而有才慧君之家兄弟同爨男女」

十數口孺人奉「舅姑以孝順處叔姒小姑之間各有恩禮以故壺内」

雍照不聞間言「臧獲訴々如也谷君仕田安府以畫名於海内孺人」

頗好畫尤善山「水嘗為關其寧作花譜寫照三千品亦得精妙彙為」

廿卷又嘗以「日課寫觀音大士像自乙卯至丁巳三年不廢一日歿」

存乎篋笥者「數紙刻以藏家云寛政十一年七月廿三日以病卒享」

年卅生「一女尚在襁褓葬于淺草源空寺越明年庚申年七月立」

石假「藻碑體其題額畫像則谷君所自作安原希曾為之銘曰」

婉「婉之性 宜爾家」室 夔饋性「謹 閨範不失」

「繪事適情 非敢佞佛 惠蘭草萎 香在遺筆」

「所乏者壽 嗟命」難必 「淺草之原 爰得卜吉」

「載封載碑 以銘」^(*)「實」

「源弘賢書」

(讀下し)

孺人姓は林、其の系は平氏より出づ。諱は幹々。字は翠蘭。文晁先生谷君の配なり。考の諱は是邦、妣は穂積氏。実は實谷君の従母なり。明

和庚寅(七年一七七〇)正月十七日を以て、孺人は江戸に生まる。

年十六にして谷君に帰(トッ)ぐ。性静淑にして才慧有り。君の家は兄弟、同爨(サン、かまど)男女十數口なり。孺人は舅姑に孝順を以て奉(ツカ)へ、叔姒(ジ、末の姉)小姑の間を処して、各々恩礼有り。以て故に壺内を雍照し、間言を蔵して訴々を獲るが如きは聞かざるなり。

谷君は田安府に仕へ画名海内に以てす。孺人は頗る画を好み、尤も山水を善くす。嘗て関其寧の爲に花譜を作り、三千品を写照す。亦た精妙を得たり。彙(アツ)めて廿卷と爲す。又た嘗て日課に観音大士像を写することを以てし、乙卯(寛政七年)より丁巳(同九年)に至る。

三年一日も廢さず。歿して篋笥に存するもの數紙、刻して以て家に蔵すと云ふ。寛政十一年(一七九七)七月廿三日、病いを以て卒す。享年

卅、一女を生むも尚襁褓に在り。淺草源空寺に葬る。越へて明年庚申年(十二年)七月立石し、仮に碑体を藻(カザ)る。其の題額、画像は則ち谷君自ら作る所、安原希曾、これが爲に銘して曰く。

婉婉(素直)の性、宜くその家の室たり。夔(ヨウ、食物)を饋(オク)るに性謹、閨は範を失せず。絵事情に適ふ。敢て仏に佞(オモネ)るにあらず。惠蘭草萎も香りて遺筆に在り。乏しき所は壽なり。嗟(ア)命は必(サダメ)難し。淺草の原、爰(ココ)に卜を得て、封を載きて碑を載せ、以て「厥、其(ソ)歟」の実を銘す。

*終りの□の不明字は仮に私の推量により宛ててみた。

三 頼山陽夫人梨影の墓銘

頼山陽(一七八〇—一八三三)の後添梨影の墓は京都東山長楽寺の頼山陽の墓の側にある。戦災に遭わぬ京都の寺々はしつとりと心を和ませてくれる。堂の右側の石段を上がり、左へ入ったところ、京の頼家の墓域に至る。山陽の妻はこちらは前の二碑と違つて健在である。

「山陽頼先生之墓」には裏面に歿年月日と享年を刻されているだけであるが、梨影の墓はその傍らに小ぶりでひっそりと建っている。表は山陽のと同じように、縁取りの枠のなかに隸体で「貞節君小石氏墓」と刻まれている。山陽の墓は大きく楷書であるが、碑銘がない。梨影夫人の墓の裏面には銘文がある。前妻は山陽二十歳の時、広島藩お医御園道英の女淳と結婚したが、翌年には出奔、狂気を発し、座敷牢に入れられ、妻は離縁している。

山陽はやがて菅茶山に預けられたが、文化八年京へ出る。江間細香と出合ったのが文化十年という。翌る十一年に春、医師小石玄瑞の侍碑梨影と同棲、やがて正式な妻に昇格する。疋田藤右衛門の娘である。

中村真一郎は『頼山陽とその時代』（昭和四十六年 中央公論社）の中で、細香の存在に最も悩まされたのは、もちろん、何も知らないで嫁にきたおりえさんである。

彼女としても山陽が放蕩者だということくらいまでは知っていたろうし、彼女を納れる直前に、「新宮」という女を、二両出して縁を切ったということくらいまでは知っていたろう。

……しかし、細香との結婚話がうまく行かなくて、その代りに家に納れたりえには、間もなく子供ができたので、両親とも相談して、結局、彼女を妻とした。……（それまで梨影は、表面的には「女中」ということになっていた。）しかし、広島ではりえを出して、別に乳母を備うのは余計な物入りだから、というような考え方に落ちついた。……

……梨影は家庭を守る女性としては、理想的な世話女房であったようである。徳富蘇峰は彼女を、「米国流の細君にあらずして、独逸流の細君たりしが如し」と述べている。また女中上りだったゲーテの妻と比較した人もいる。

市島春城は頼家の台所を預れる女性としては、梨影こそ正に適任であった、と述べている。それでもし細香が妻となっていたら、門生や客や世話は一切、婢僕任せということになり、家の治りはつか

なかつたらう。……

そしてさらには、花柳界ではやった「駱駝」の歌のことをあげ、

……山陽は人前に出るのなるべく妻を伴うようになっていった。それによって梨影を公式に世間に妻として押し出そうとしたわけだし、また、それによって細香に対する嫉妬を解消させようとしたのだろう。

そうして彼は死に臨んで、至れり尽せりの遺言状を妻に残した。
(中略)

りえは山陽歿後も、遺事三人を成人させるために、以前にも増して「鬼のようになり候て」がんばり続けた。

その行状は女子の亀鑑であるということになり、弘化三年（一八四六）、京都町奉行伊那遠江の褒贈を受けることになった。

と記している。聊か引用が長すぎたが、肝心の後藤松陰撰文になる墓銘はつぎの通りである。碑陰に三一字、八行に刻す。

君諱梨影小石氏江州人頼山陽先生入京娶爲繼室君性謹儉佐先生成家安
政乙卯九月十七日病切享年五十九後先生二十四年矣葬先生墓側於東山
長樂寺君生三男一女長辰藏次次復承家次醇女先没君既寡子皆幼而持操
屹然凡事皆遵奉遺命夙夜勤苦教育二孤終致其成立事聞于 官特褒而旌
之因私諡曰貞節蓋取其褒詞云二孤謂余舊門人也請碑文但先生之碑未有
文焉然此不必藉文也乃略叙君如此銘曰

余庚同君 悉君平生 終始維一 莫非其貞 君可以瞑 永有世榮

長樂之山 山美泉清 先生名節 得君倍明

孝子復立つ。

安政三季丙辰九月後藤機撰 梁緯隸碑面 宮原龍書 孝子復立

(読下し)

君諱は梨影、小石氏。江州の人なり。頼山陽先生、入京して娶りて継室と爲る。君、性謹儉、先生を佐けて家を成す。安政乙卯(二年一八五五)九月十七日、病物(ボツ、歿)す。享年五十九。先生に後れること二十四年なり。先生の墓側、東山長樂寺に葬る。

君は三男一女を生むも、長の辰藏は夭す(文政三年十月生、八年三月歿)。次は復(支峯、文政六年十一月生)、家を承(ツ)ぐ。次は醇(鴨崖、

文政八年五月生)。女は先に没す。君、既に寡(ヤモメ)になるも、子は皆幼く、操を持ち、屹然たり。凡そ事は皆遺命を遵奉し、夙夜勤苦して二孤を教育し、終に其の成立を致す。事は官に聞へ、特に褒じてこれを旌(アラハ)す。因りて私に諡(オクリナ)して貞節と曰ふは、蓋(ケダシ)其の褒詞を取ると云ふ。二孤は謂(イワユ)る余が旧門人なり。碑文に請はる。但し先生の碑は未だ文有らず。然れども此れ必ずしも文を藉(ヨウ)ざるなり。乃ち略(ホボ)君を叙(ノ)ぶること此(カク)の如し。銘に曰く。

余は庚(トシ)君に同じ。君の平生を悉(ツク)す。終始維れ一つ。

其の貞にあらざるはなし。君以て瞑すべし。永く世に榮へ有らん。

長樂の山。山美しく泉清し。先生の名節。君を得て倍々明かなり。

安政三年(一八五六)丙辰九月 後藤機撰、梁緯隸碑面、宮原龍書。

撰者の後藤松陰(一七九七—一八六四)は篠崎小竹の娘竹の女婚にあたる。大阪の人、名は機、字は世張、通称俊(春)蔵といった。松陰は寛政九年の生まれで、銘文のとおり梨影と同庚(同年)である。牧百峯も遺児の教育に携わっているが、彼は梨影の里方にあたる小石家の娘と結婚している。表の隸書は梁川星巖(一七八九—一八五八)で梁孟緯と修する。碑陰の書は宮原節庵(一七八九—一八六八)、名は龍、字は士淵、通称を謙蔵といった。

山陽の墓に銘を欠いていることについて、市島春城は、刻すべき文面が既に篠崎小竹によって成っていながらそのままとなったのは、種々の説も伝わっているが、門人中に議論が紛糾した結果だといひ、小竹の女婚松陰の不人望が、遂に小竹の文章にまで及んで、結局、未刻のまま過ぎてしまったらしいとしている。

梨影についても、山陽は初め小石の媒酌で、雨宮某の娘と見合いの日先方が現れず、その席を周旋していた女中の彼女を見初めて、説き落として、小石の養女として、山陽の室となったと伝え、心がけのよいために、相当の婦人となったに違いない、と述べている。『随筆頼山陽』大正十四年 早稲田大学出版部、随筆集(クレス出版)第一巻所収。

付記、本稿は先に得た本学研究助成金による成果の追録分として先号に続けて執筆した。記して謝意を表する次第である。